



農民組織を強化するため、土のう袋を使って農道を補修する技術を農民に伝えるデモンストラーションに参加した増古さん(ケニア)

## たくさんの方が国際協力に参加できるようサポートしたい

JICA国内事業部で、草の根技術協力事業を担当する増古さん。NGOや自治体、大学など、より多くの市民が国際協力に参加し、グローバル人材への成長の足がかりとなるよう、環境を整えるサポートをしている。

### 高

校生の時にレイチェル・カーソンの『沈黙の春』を読んで興味を持った環境問題を科学的に研究したいと思い、大学院では土壌学を学びました。その調査のため、ブルキナファソを訪れたのですが、そこで初めて開発途上国の現状を知り、環境問題の解決には自然環境とそこで生活する人々の共存が欠かせないことに気付き、持続的な農業へと関心が広がりました。また、現地の厳しい生活環境で活躍している日本のNGOの方やJICA専門家、青年海外協力隊と出会い、そういった方々とともに働く仕事したいと思い、JICAに就職しました。

最初の配属先となったアフリカ・中近東・欧州部では、ガーナとエチオピアを担当。その国全体の状況を把握し、新規プロジェクトの検討などに携わりました。そして3年間勤務したケニア事務所では、自分の関心分野の農業・農村開発セクターの担当に。小規模灌漑、コミュニティ開発、園芸生産の3分野のプロジェクトが始まったばかりでしたので、農業生産と農民の収入を増やすため、その指導役となる農家や普及員への研修の進め方などを、JICA専門家とともに考える日々でした。またケニアでは、国内でも民族によって習慣に大きな違いがあったり、2007年末の大統領選挙後の暴動を目の当たりにしたりと、慣れないこともたくさんありました。しかし、農家のために献身的に働く普及員な

ど、自分の国をより良くしようと頑張る多くのケニア人と出会い、共に活動できることにやりがいを感じました。

最後の一年間は、草の根技術協力事業も担当しました。これは、日本のNGO、大学、地方自治体などによる提案をODA（政府開発援助）の一環としてJICAとともに実施する事業です。この時に、JICAとは違った視点から、NGOの方々がユニークな発想をしたり、住民のニーズをとらえていたり、多くのことに気付かされました。JICAは途上国政府の人材育成など国レベルの支援で強みを発揮しますが、NGOは草の根レベルの現場に精通しているという強みがあると思います。ですので、草の根技術協力事業では、NGO独自のノウハウをODAとして生かすことができ、また、そこから得られた知見をJICA本体の事業にも反映することができれば、より効率的な国際協力になるのではないかと思います。

現在の国内事業部では、ケニアでの経験を生かし、各地のJICA国内拠点を担当する草の根技術協力事業の全体の調整を主に担当しています。この事業には、海外での経験が少ないNGOなどを対象にした「草の根協力支援型」と、豊富な経験を持つNGOなどを対象にした「草の根パートナー型」があり、年間約150件が実施されています。さらに、地方自治体が独自に持っているノウハウ



JICA国内事業部  
市民参加推進課  
**増古 恵都子**  
MASUKO Etsuko

大学院修了後、2002年にJICAに就職。アフリカ・中近東・欧州部（当時）、中東・欧州部、ケニア事務所を経て、2010年4月から現職。

を活用した「地域提案型」もあり、年に70件ほど実施されています。このことは日本の地域社会にとつて、自分たちの知識や経験を国際協力に生かせるばかりか、海外からの研修員を受け入れることで地元



草の根技術協力事業で地域住民に農業技術を普及。その集会に参加したケニア人の若い母親たちと増古さん

が国際協力に、参加できる。良い機会になっていると思います。

その中で、NGOや大学、自治体などの皆さんがより活動しやすいように、事務手続きや事業のモニタリング方法などの制度を改善していくことも私の仕事です。これまでいろいろな仕事をしてきましたが、いつも、現場で活動する人が力を発揮しやすい環境を整えることを意識しながら取り組んでいます。今は事業の現場からは少し遠いですが、現場の意見を取り入れながら事業をより良いものにしていくことで、より多くの市民の皆さんが国際協力に参加できるようにしていきたいと思っています。JICA地球ひろばや各地のJICA国内拠点におけるNGO研修や開発教育支援事業などと合わせ、こういった市民参加事業がグローバル人材の育成への、足がかりになればと思います。